

季刊誌 みなぎし

第11号



全盲老連

NATIONAL COUNCIL OF THE HOMES
FOR THE AGED BLIND JAPAN

02・ごあいさつ／全盲老連からのお知らせ

03・松峰園(施設概要・特徴)

04・津軽ひかり荘(施設概要・特徴)

05・祥風苑(施設概要・特徴)

06-07・インタビュー① 畠山アエさん

08-09・インタビュー② 三上ミチエさん

10-11・インタビュー③ 富沢勝さん

ごあいさつ

本誌は、全国の養護盲(聴)老人ホームに暮らすお一人おひとりの人生に耳を傾け、その言葉を紡ぎ、社会へと届ける試みとして始まりました。各施設を巡り、静かに語られる声を丁寧に紡いできたこの歩みは、前号で10号となり一つの節目を迎えました。

季刊誌「まなざし」のインタビューには、人生の重みと、それを支える現場の営み、そして見えにくいままにされてきた現実が確かに刻まれています。見えない、見えにくい、聞こえない、聞こえにくいからこそ感じ取られる世界があります。本誌に収められた言葉の一つひとつは、その豊かな内面の証であり、同時に私たち社会のあり方を問い返す「まなざし」でもあります。

今後、本誌は残るホームへの取材を通じて、一巡という大きな節目へと向かいます。その時、集められた声をもとに、次の時代の盲老人並びに高齢聴覚障害者福祉の姿を描いていく責任を負うことになるでしょう。

小さな声を、確かな社会の言葉へ。その歩みを、これからも続けてまいります。

特定非営利活動法人 全国盲老人福祉施設連絡協議会

全国盲老人福祉施設連絡協議会 季刊誌「まなざし」発刊に関するお知らせ

全国に開設されている盲老人ホーム、聴覚に障がいを持つ高齢者専用の老人ホームに入所利用されている方々にインタビューさせていただきます。一つのホームで、おひとりの入所利用者に代表していただきます。主なインタビュー項目は、下記の5つの項目です。

- ①今お住まいのホームを選んだ理由、知った経緯は？
- ②今のホーム生活は？
- ③ホーム入所までに苦労したことは？
- ④障害者支援サービス或いは介護サービスの利用歴は？
- ⑤これからの高齢視覚・聴覚障害福祉に望む事は？

これらインタビューで得た「声」をまとめ、ホームの入所前と後のお気持ちの変わったところを教えてください、老人ホームの在り方など、発信してまいりたいと思います。

松峰園の概要・特徴



【盲養護老人ホーム 松峰園】秋田県秋田市浜田陳ヶ原15-8 ☎018-828-6600

社会福祉法人松寿会運営の「盲養護老人ホーム松峰園」は、秋田県内唯一の盲施設として1974(昭和49)年1月16日に開園しました。現在、定員55名で、視覚障害のある高齢者を中心に安心して暮らせる生活の場を提供しています。

松峰園の創設の原点は、創設者の小山田四郎氏が村長時代、目の不自由な高齢女性が火災から逃げ遅れて亡くなった痛ましい事故にあります。「目の不自由な老人にも安心して楽しく余生を送る権利がある」という強い思いから設立計画が進み、東北で3番目の盲養護老人ホームとして誕生しました。

開園準備中は第一次オイルショックによる資材高騰や燃料不足に直面しましたが、地域の支援が施設を後押ししました。県内小中学校の協力による鉛筆の販売収益が設備費に充てられたほか、石油販売会社が燃料確保に尽力するなど、多くの善意に支えられて無事開園を迎えました。

館内には、バリアフリーやスロープ、点字ブロックを設置。手すりには位置確認用のクルミが埋め込まれ、視覚障害者の自立的な移動を支えています。法人内には心身の安らぎを願う満願観世音大菩薩像が建立されているほか、リハビリに使える手す

り付き遊歩道や、運動・地域交流の場となる体育館も整備されています。

現在の利用者は女性が7割で平均年齢は81.8歳、最年長は99歳です。かつては先天性の視覚障害者が大半でしたが、現在は加齢黄斑変性などによる中途失明者が増えており、鈴木正行施設長は「後から見えなくなった方は生活の再構築に大きな苦労を抱える」と語ります。また、近年は精神疾患や高齢・虚弱化が進んだ利用者の病院退院後の受け皿としての役割も担っています。

園では生きがいづくりのため、体操やカラオケ、創作活動などを実施。近年はスマホやパソコンの音声読み上げ機能を活用して外部と交流する人もおり、時代に合わせた社会参加を目指しています。

中学生や企業向けに高齢者疑似体験研修を行うなど地域共生事業にも取り組んでいます。鈴木施設長は「職場環境の改善と尊厳を守る生活環境づくりは両立しなければならない」と力を込めます。松峰園は、先人の理念を受け継ぎながら、これからも地域とともに歩み続けていきます。

生活の風景



▲施設の台高から見える綺麗な夕日



▲夏祭り



▲羽川青年会の「やまはげ」慰問



▲作品展示



▲新年を迎えました



▲ミズの皮むき



▲豆まきではなく「豆配り」



津軽ひかり荘の概要・特徴



【養護盲老人ホーム 津軽ひかり荘】青森県弘前市金属町5-1 ☎0172-55-5578



佐々木哲理事長

青森県唯一の養護盲老人ホーム「津軽ひかり荘」を運営する社会福祉法人愛成会の原点は、明治35(1902)年に佐々木五三郎が私財を投じて創設した東北育児院(のちの弘前愛成園)にあります。大凶作で行き場を失った孤児を救うため、「困っている人がいるなら助けなければならない」という強い信念で

始まった活動は、時代とともに児童福祉から高齢者・障害者福祉へと発展し、「地域が必要としている福祉をつくり続ける」という伝統を築いてきました。

津軽ひかり荘の前身は、昭和46(1971)年に開設された東北初の盲老人ホーム「ひかり寮」です。当時、視覚障害のある高齢者の多くは一般の施設で暮らしていましたが、十分な設備がなく不安を抱えていました。しかし健常者と合同の環境では遠慮が生まれるため、盲老人が主体的に自分らしく生きられる専門施設を目指し、昭和57(1982)年に「津軽ひかり荘」として独立・開設されました。同じ障害を持つ仲間との生活は利用者に自信と活力を取り戻させ、施設は青森県全域から利用者を受け入れる場へと成長しました。

平成28(2016)年には弘前市金属町へ移転。新施設は、回廊式構造や連続した手すり、位置を示す鋏、コーナーセンサーなどを備え、視覚障害者が安全に暮らせる工夫が随所に施されています。

近年は糖尿病などによる中途失明者が増加しており、突然視力を失い不安を抱える人々を支える役割は一層大きくなっています。佐々木哲理事長は「人生を諦めかけた人が自分らしさを取り戻せる場所」として、120年以上の歴史が育んだ理念を胸に、今後も視覚障害高齢者の暮らしを支え続けます。

施設&生活の風景



▲キッチンカー訪問



▲散歩



▲秋を感じる会



▲春を感じる会



▲川柳を楽しむ会



▲大運動会



▲中庭



▲遊歩道

祥風苑の概要・特徴



【盲養護老人ホーム 祥風苑】岩手県大船渡市猪川町富岡148 ☎0192-26-3111



山崎和彦理事長

岩手県大船渡市猪川町にある「祥風苑」は、1993年4月に開設された岩手県内唯一の盲養護老人ホームです。創設者は地域医療に尽力した医師の山崎伊一郎・シゲ夫妻であり、日中自宅に一人取り残される高齢者や、一般の施設では受け入れや生活が難しい視覚障害者を支えるため、関係者が県内各地で実態調

査を重ねてこの専門施設を誕生させました。

安全性を最優先して選ばれた大船渡市内を一望できる高台の立地は、2011年の東日本大震災の際に大きな真価を発揮しました。施設は直接の津波被害を免れ、停電や物資不足に直面する中でも職員が奔走して炊き出しを行い、行き場を失った地域住民や障害者ら一時500人規模の避難者を受け入れる地域の命綱となったのです。

現在、定員50人の館内では、手すりの配置や職員による移動支援など安全に配慮しつつ、過度な介助を避けて自らできることは自分で行うという安全と自立支援の両立が徹底されています。また、創設者の精神を受け継ぐ山崎家の医師らによる定期的な訪問診療など、健康管理や体調急変時にも迅速に対応できる医療との手厚い連携も大きな特徴です。さらに、地域ボランティアによる音声図書の提供や多彩なクラブ活動、季節ごとの行事を通じ、社会とのつながりや生きがいづくりにも取り組んでいます。

創設者の「困難な状況にある高齢者をどうにかしてあげたい」という強い思いは今も職員たちに受け継がれ、毎月の避難訓練など防災意識も高く維持されています。目の不自由な高齢者が人生の主人公として自分らしく安心して暮らせる「第二のふるさと」として、これからも地域とともに歩み続けていきます。

施設&生活の風景



▲お正月



▲お花見バスハイク



▲スイカ割り



▲クリスマス忘年会



▲コーラスクラブ発表



▲スポーツ大会(玉入れ)



▲相模甚句の会(拍子木体験)



▲苑庭散歩



①松峰園を選んだ理由、知った経緯は？

私は令和7年6月に松峰園へ入所しました。それまでは秋田県内で一人暮らしを続けていました。夫を亡くしてから、畑仕事や家事、買い物、食事の支度まで何でも自分でこなし、人の手を借りることなく生活してきました。

転機になったのは視力の低下です。三年ほど前から目の具合が悪くなり、片方の目が見えなくなりました。その後、残っていた目の視力も徐々に低下し、これまで当たり前にできていたことが難しくなりました。買い物や日常生活に不安を感じるようになり、「このまま一人暮らしを続けるのは難しいかもしれない」と考えるようになったのです。

それまで私は、視覚障害者向けの施設があることを知りませんでした。また、「まだ施設に入る年ではない」という気持ちもありました。そこで役所へ相談したところ、担当者の方が親身に話を聞いてくださり、松峰園を紹介してくださいました。

実際に見学すると、職員の皆さんが温かく接して
くださり、安心して暮らせそうだと感じました。一人で
無理を続けるより、必要な支援を受けながら暮らし

た方が良いと思うようになり、入所を決意しました。今振り返ると、あの時相談して本当に良かったと思っています。

②松峰園の生活は？

入所してまもなく一年になりますが、毎日安心して楽しく暮らしています。

何よりありがたい
のは、職員

の皆さんが親切なことです。長年一人で暮らしてきた私にとって、人に支えてもらう生活は初めてでしたが、食事や入浴、洗濯など日常生活を助けていただけるので、とても安心感があります。

また、人との交流も大きな楽しみです。私は昔から話をするのが好きで、入所者の皆さんや職員の方々と毎日会話を楽しんでいます。同年代の方も多く、廊下や食堂で顔を合わせると自然と話が始まります。友人もたくさんでき、毎日がとても賑やかです。

施設ではレクリエーションやカラオケなども行われています。私は歌うより皆さんの話を聞いたり、一緒に過ごしたりする方が好きですが、そうした時間が生活の楽しみになっています。訪問販売や買い物の機会もあり、施設の中だけに閉じこもらずに過ごせることもありがたいですね。

私は長年農業をしてきたので、施設で家庭菜園に取り組んだ際には参加しました。野菜づくりの経験をお話することもあり、少しでも役に立てばうれしく思っています。土に触れると昔を思い出し、懐かしい気持ちになります。

入所前は「施設生活は不自由なのでは」と思っていました。しかし実際には、人と笑い合いながら安心して暮らせる毎日があり、今では「入れていただいて本当に良かった」と感じています。

③松峰園に入所するまでに苦労したことは？

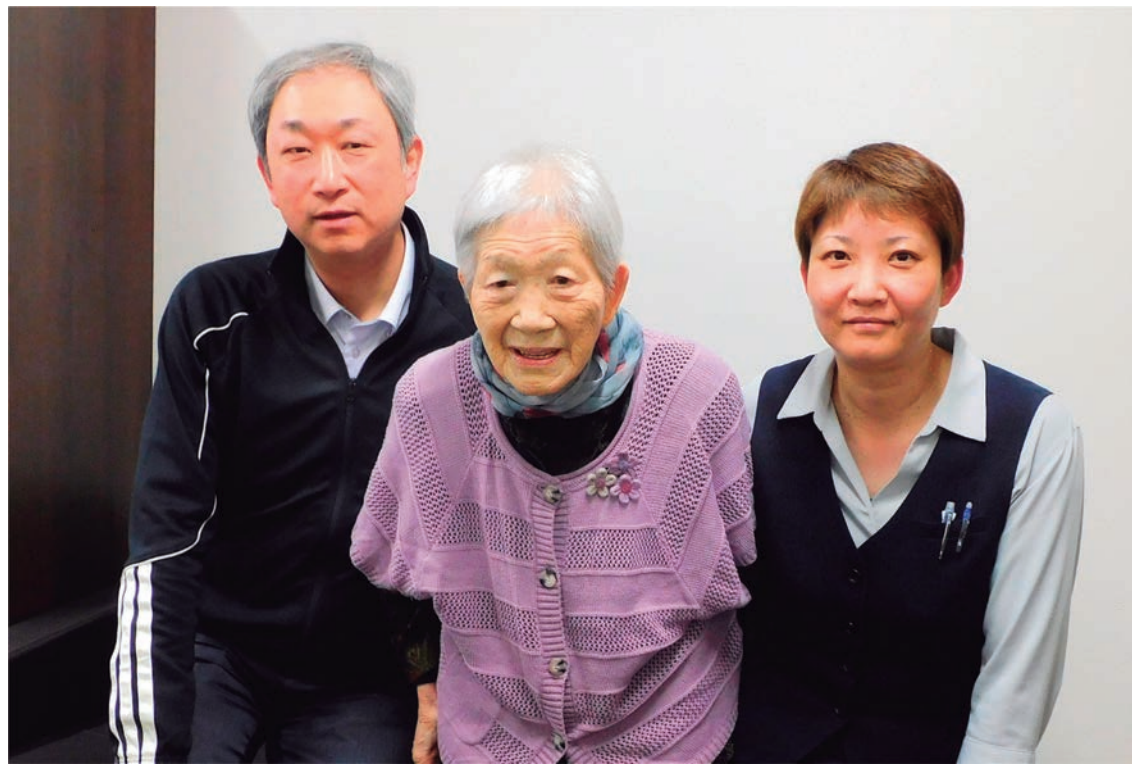
手続きそのものについては、あまり苦勞した記憶はありません。役所の担当者の方が丁寧に対応してくださり、入所までは比較的スムーズに進みました。

ただ、一番難しかったのは自分自身の気持ちの整理だったと思います。

私は長年、自分の力だけで生活してきました。夫を亡くした後も、家や畑を守りながら暮らしてきました。「人に頼らなくても何とかなる」という思いが強くありました。そのため、視力が悪くなっても当初は「まだ大丈夫」「施設には入りたくない」と考えていました。

しかし現実には、一人暮らしを続けることへの不安が少しずつ大きくなっていました。役所の担当者から生活上の危険や不便さについて説明を受ける中で、自分でも支援が必要な状態であることを認めざるを得なくなりました。

長年続けてきた自立した生活を手放すことには葛藤がありましたが、勇気を出して一歩踏み出した結果、今の安心した暮らしにつながりました。今では



鈴木正行施設長（左）と伊藤恵主任生活相談員（右）

「あの時決断して良かった」と心から思っています。

④障害者支援サービス或いは介護サービスの利用歴は？

松峰園へ入所するまで、本格的な障害者支援サービスや介護サービスを利用した経験がほとんどありませんでした。

高齢になっても、自分でできることは自分でやりたいという思いが強く、掃除や洗濯、料理、買い物、畑仕事まで一人で続けていました。訪問介護や家事援助をお願いしたこともなく、九十歳を過ぎても自立した生活を送っていました。

しかし視力の低下によって状況は大きく変わりました。買い物や移動に不安を感じるようになり、一人で安全に暮らし続けることが難しくなったのです。

その時に初めて役所へ相談し、支援制度について説明を受けました。そして松峰園への入所を決めたことが、私にとって本格的な福祉サービス利用の始まりでした。

最初は人に手伝ってもらうことに少し戸惑いもありましたが、今では必要な支援を受けながら暮らすことの大切さを実感しています。支援は決して甘えではなく、安心して生活するための大切な力なのだと思います。

⑤ これからの高齢視覚・聴覚障害福祉に望む事は？

特別に大きな要望があるわけではありません。むしろ今の生活を支えてくださっている多くの方々への感謝の気持ちの方が強いです。

ただ、高齢になり、視覚や聴覚に障害を抱えると、一人ではできないことが増えていきます。私自身も最後は多くの方々に支えられて暮らすようになりました。だからこそ、障害があっても安心して支援を受けられる環境をこれからも守ってほしいと思います。

また、安心して暮らせる場所の存在はとても大切です。私はこのホームで職員の皆さんや仲間に支えられ、毎日会話をしながら穏やかに暮らしています。こうした環境が今後も維持され、必要とする人が利用できる社会であってほしいと願っています。

さらに、これからは高齢化が進み、支援を必要とする人も増えていくでしょう。その一方で、私たちを支えてくださる施設職員の皆さんの役割はますます重要になります。利用者だけでなく、支援する側の人たちが安心して働ける環境づくりも大切だと思います。

最後にお伝えしたいのは、「感謝を忘れないこと」です。私は今、穏やかな毎日を過ごすことができています。それは多くの人の支えがあってこそです。障害があっても高齢になっても、誰もが安心して暮らせる社会であり続けてほしい。そして私たち自身も、支えてくださる方々への感謝を忘れずに生きていくことが大切だと思っています。

①津軽ひかり荘を選んだ理由、知った経緯は？

私は津軽ひかり荘のことを、目が見えていた頃からよく知っていました。若い頃、岩木町で町内会のボランティア活動やホームヘルパーとして働き、高齢者や障害のある方の支援をしていました。その頃から津軽ひかり荘にも出入りし、運動会や季節行事のお手伝いをしていました。利用者の皆さんが安心して暮らし、職員の方々も温かく接している様子を見て、「とても良い施設だ」と感じていました。

その後、緑内障で視力を失いました。白内障と思って受けた手術後にほとんど見えなくなり、大きなショックを受けましたが、「施設に入るなら津軽ひかり荘」と迷わず決めました。長年親しんできた施設であり、視覚障害者が安心して暮らせる環境を知っていたからです。

見えなくなってから約10年間は、長男が仕事を辞めて私を支えてくれました。しかし、親として「いつまでも息子に頼るわけにはいかない」と思い、80歳を迎えた頃に入所を決断しました。昔はボランティアとして訪れていた場所で、今は

利用者として暮らしている。不思議な縁ですが、私にとっては人

生の流れの中で自然にたどり着いた場所だと思っています。

②津軽ひかり荘の生活は？

入所してまだ数か月ですが、少しずつ生活にも慣れてきました。最初は部屋から食堂へ行くだけでも迷い、手すりを頼りに歩いていましたが、毎日の積み重ねで建物の構造を覚え、安心して移動できるようになりました。困った時には職員の皆さんがすぐ声を掛けてくださるので心強いですね。

自宅では長男が食事や掃除、洗濯、買い物まで支えてくれました。その負担を少しでも軽くできたことを嬉しく思っています。

ホームでは新しい友人もできました。同じように視覚障害のある方が多く、お互いの気持ちが分かるので自然と会話が弾みます。食堂でのおしゃべりや、これから予定されている運動会、季節行事、カラオケも楽しみです。

また、毎日デイズー図書を聴くことも大きな楽しみです。本を読むことはできなくなりましたが、小説や映画の音声資料を通してさまざまな世界に触れられることに感謝しています。新しい仲間と支え合いながら、前向きに毎日を過ごしています。

③津軽ひかり荘に入所するまでに苦労したことは？

私にとって一番大変だったのは、施設探しではなく、視力を失った現実を受け入れながら生活することでした。

70歳頃までは畑仕事や車の運転もしていましたが、視力が急激に低下し、手術後にはほとんど見えなくなりました。思うように動けず、夜中にトイレへ向かう途中で転倒したこともあり、一人暮らしの危険を実感しました。

そんな私を10年間支えてくれたのが長男です。食事や掃除、お風呂の介助まで生活のほとんどを担ってくれました。本当に感謝しています。

一方で、「息子には息子の人生がある」とも考えていました。息子は「このまま家で暮らしてもいい」と言ってくれましたが、親として負担を掛け続けることはできません。80歳になり、自分の体力や息子の将来を考え、入所を決断しました。今振り返れば、その決断は間違っていなかったと思っています。

④障害者支援サービス或いは介護サービスの



船木由紀子次長（左）と下山宏伸園長（右）



三上さんと江利山久美子生活相談員（右）

利用歴は？

目が見えなくなってからも、訪問介護やガイドヘルパーなどの制度はほとんど利用しませんでした。生活の多くを長男が支えてくれたからです。

私はもともとホームヘルパー1級の資格を持ち、高齢者や障害者を支援する仕事に携わっていました。利用者ではなく支援する側として長く福祉に関わり、ボランティア活動を通じて津軽ひかり荘とも交流してきました。その経験から制度や支援の大切さは理解していましたが、自分自身は家族の支えによって生活を続けてきました。

現在は津軽ひかり荘で職員や仲間の皆さんに支えられています。支援する側と支援される側の両方を経験できたことは、私にとって大きな財産になっています。

⑤これからの高齢視覚・聴覚障害福祉に望む事は？

一番望んでいるのは、人と人との交流の機会をもっと増やしてほしいということです。目や耳が不自由になると家に閉じこもりがちになり、人と話す機会が減る

ことで心まで元気を失ってしまいます。私自身も見えなくなった当初は孤独を感じました。

だからこそ、同じ立場の人同士が語り合える場や、地域の人と交流できるサロンのような機会がもっと増えてほしいと思います。人は誰かと話すだけでも元気になれるものです。

また、ボランティア活動に参加しやすい環境づくりも大切です。私自身がボランティアとして施設に関わってきた経験から、地域とのつながりが利用者の安心につながることを実感しています。若い世代にも福祉活動へ関心を持ってもらえる仕組みが広がれば嬉しいですね。

さらに、視覚障害や聴覚障害のある高齢者向け施設や支援制度について、もっと多くの人に知ってもらいたいと思います。困っていても相談先や施設を知らない人は少なくありません。必要な情報が必要な人へ届くよう、行政や関係機関には積極的な情報発信をお願いしたいです。

障害があっても人生は終わりではありません。私も家族や仲間、多くの方々に支えられて今日があります。高齢になっても障害があっても、人とのつながりの中で、自分らしく笑顔で暮らせる社会になってほしいと願っています。



① 祥風苑の園を選んだ理由、知った経緯は？

私は昭和3年10月生まれです。若い頃は富山県で配置薬の仕事をし、北海道や東北、新潟など各地を回って働いてきました。しかし55歳頃から網膜色素変性症で視力が低下し、障害者手帳を取得しました。

その後、故郷の岩手へ戻り、盛岡市の軽費老人ホームで約十年間生活しました。そこでは食事や買い物などを自分で行わなければならない、視力が悪くなるにつれて日常生活が大変になりました。将来、一人で暮らし続けられるのかという不安も大きくなっていました。

そんな時、現在のホームを運営する山崎会長と理事長から「視覚障害者のための施設ができるので入ってみませんか」と声を掛けていただきました。六十五歳だった私は迷うことなく入居を決意しました。

平成5年7月3日、開設間もないこのホームへ入居し、30年以上が過ぎました。岩手県初の視覚障害者向け養護老人ホームでしたが、不安はありませんでした。信頼できる方々が運営される施設であり、「ここなら安心して暮らせる」と感じたからです。今振り返ると、あの時の出会いが人生最大の転機だったと思っています。

② 祥風苑の生活は？

ここで暮らして33年になります。一言で言えば「本当に快適」です。

軽費老人ホーム時代は食事や買い物もすべて自分で行っていたのですが、今は食事や入浴など日常生活を職員の皆さんが支えてくださいます。常に気に掛けてもらえるので、不自由を感じることはほとんどありません。

職員の皆さんはとても親切で、困ったことがあればすぐ相談できます。私は九十代後半になりましたが、元気に暮らせているのは皆さんのおかげだと感謝しています。

これまで書道や俳句、コーラスなど様々な活動にも参加しました。特にカラオケは三十年近く続け、北島三郎さんや鳥羽一郎さん、福田こうへいさんの歌をよく歌いました。仲間と一緒に歌う時間は何よりの楽しみでした。

コーラスでは施設外の発表会にも出演し、多くの方に喜んでいただきました。年齢とともに耳が遠くなり、現在は以前のように歌うことは難しくなりましたが、部屋でラジオを聴くことが毎日の楽しみです。

このホームでは安心した生活と趣味、仲間との交流が両立しています。長年ここで暮らせたことを本当に幸せに思い、毎日感謝しながら過ごしています。

③ 祥風苑に入所するまでに苦労したことは？

一番苦労したのは、視力が低下していく中で生活を続けたことです。

配置薬の仕事では薬箱を担ぎ、北海道から新潟まで広い地域を歩き回りました。若い頃は体力にも自信がありましたが、55歳頃から網膜色素変性症で徐々に見えなくなり、それまで当たり前になっていたことが難しくなりました。

買い物では商品や値段が分からず、ヘルパーさんに付き添ってもらうことも増えました。また離婚を機に故郷へ戻り、盛岡の軽費老人ホームで生活しましたが、自炊や日常生活を続けることは決して楽ではありませんでした。

さらに年齢を重ねるにつれ、「このまま一人で暮らせるのだろうか」という将来への不安も大きくなりました。

そんな時に現在のホームとのご縁があり、安心して暮らせる場所を得ることができました。振り返れ



左から、崎山美知枝常任理事施設長、富沢さん、松本美和子副部長、村上信吾副部長

ば、苦労は多くありましたが、そのたびに周囲の人々に助けられてきました。若い頃に全国を歩いて鍛えた足腰のおかげで、今でも自分の足で歩けることをありがたく思っています。

④ 障害者支援サービス或いは介護サービスの利用歴は？

障害者支援サービスを利用するようになったのは、視力が大きく低下してからです。

軽費老人ホーム時代は自炊が必要だったため、買い物ではヘルパーさんに同行していただきました。商品や値段を確認してもらいながら必要な物を購入できたことは、大きな支えでした。

一方で、自分でできることはできるだけ自分で続けたいという思いもあり、料理などは可能な限り自分で行っていました。

現在のホームでは食事や入浴、日常生活全般について職員の皆さんが支援してくださっています。無理をせず必要な時は助けてもらえる環境が整っており、安心して生活できています。

私が受けてきた支援は、見えないことで困る部分を補っていただくものでした。そのおかげで自分らしい生活を続けることができ、現在も穏やかな毎を送ることができています。

⑤ これからの高齢視覚・聴覚障害福祉に望む事は？

まず望むのは、安心して暮らせる環境づくりです。東北は大きな地震や津波を経験しており、目の不自由な高齢者にとって災害時の避難は大きな不安があります。安全に避難できる体制や施設整備をさらに充実していただきたいと思います。

また、高齢者施設では耐震化やバリアフリーだけでなく、個室など安心して生活できる住環境の整備も大切です。

さらに少子化が進む中で、福祉を支える人材の確保も重要だと思います。介護や福祉の仕事に携わる方々が安心して働ける社会であってほしいと願っています。

中途失明者への支援も欠かせません。途中で視力を失うことは大きな不安を伴います。相談体制や生活訓練を充実させ、孤立しない環境を整えていただきたいと思います。

そして一般の皆さんには、歩道や点字ブロックの上に物を置かないなど、日常の小さな配慮をお願いしたいと思います。少しの思いやりが、私たちにとって大きな安心につながります。

私はこれまで多くの方々に支えられて生きてきました。障害のある人もない人も互いを思いやり、支え合える社会がこれからも続くことを心から願っています。



NATIONAL COUNCIL OF THE HOMES
FOR THE AGED BLIND JAPAN

特定非営利活動法人
全国盲老人福祉施設連絡協議会



発行元／特定非営利活動法人
全国盲老人福祉施設連絡協議会
〒635-0102 奈良県高市郡高取町大字壺阪3番地
☎0744-52-2088

発行人／常盤勝範

取材・編集・印刷／奈良新聞社

発行日／2026年8月
